OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	行政、保健所の仕事を求めて
Author(s)	更家, 充
Citation	大阪公衆衛生. 1992, 61, p. 11-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

寄　稿

行政、保健所の仕事を求めて

堺市金岡保健所（地域保健課兼務）
更　家　　充

私は、市大での２年間の研修を終えてから富田林市のＰＬ病院の小児科に６年間勤め、１年間はフリーになって充電し、昨年10月に多くの選択肢の中から＜行政の医師＞を選んで堺市に入り、５か月が経った。

銀行をやめて医学部に入った時、無医村や僻地などの医師が一人しかいないような所で医療行為だけでなく、その地域の医療行政もやりたいと思っていたので、その選択は、自分にとっては初心に帰ったといったほうが適当だったのかもしれない。それに、以前、行政学を専攻していたので、２つの大学で学んだことを統合することにもなり、＜医師＞の目と＜法学士＞の目のダブルで見ることができるのではと思っている。

病院や診療所は当然のことながら、患者（入院、外来を含めて）にしか関心がないという場合がほとんどで、医師の役割も患者さんとの１対１の関係が全てで、その意味では単純である。一方、保健所の守備範囲は広く、地域の衛生、保健、それに最近は福祉との連携がいわれ、更に広がっていくように思える。座っていないで＜所＞から出て、問題を見つけ動き出す＜保健所＞、その点が、なんといっても医療機関との１番の違いだと感じている。

堺市では、第１に、専門職としての医師の特性を生かしたい。これには、２つの意味がある。医師がやらねばならない保健所業務に従事するということと、もう１つは、政策決定に至る過程でのブレーンとしての役割、第２に、現場と本庁を確実につなげる役割、行政の大きな機構がいきいきと活動的であるためには、誰かがその役割を担わねばならないと思っている。第３に、具体的に、超高齢社会を豊かに乗り切る、安心して老いることができるまちづくり。今、高齢者問題は、誰にとっても避けられない問題で、だからこそ、この問題に誰もが積極的に関わり、それなりの解決に至れば、それはハンディキャップのある全ての人の問題の解決につながると思う。

１年間の充電期間中に、デンマークの高齢者福祉制度を探る研修旅行に参加したが、この研修で実感した、＜ねかせたきり＞のいない＜北欧の福祉の理念と政策と現実＞を、今後の活動に生かしていきたいと思っている。（デンマークの高齢者福祉の３原則は、１：人生の継続性の尊重　２：自己決定権の尊重　３：自己能力の活用　で、高齢者住宅の建設、個室のホーム、24時間出前性の在宅サービス、豊かな補助器具、徹底した自治・分権化、医療と福祉の明確な区別に、その実態をみることができる。）

僕より１年４か月先に市大小児科から堺市に入られた西牧先生が、着任の挨拶で「私は、保健所に夢を持ってきました」と挨拶されたと聞いている。実にいい言葉だと感心した。＜夢をもって＞やるべきことは、たくさんある。材料は保健所の中にも、街にも、一杯あると思う。それを、楽しみながらやっていきたい。

この５か月、金岡保健所をベースにして、多くの人に支えられ、堺市全体のことにも関わってきた。これからも、いろんな人と協力して＜めげないで＞やっていきたいと思っている。